

## 『本朝二十不孝』考

— 創作意図の二元性を中心に —

鄭 澄

「不孝咄」の形で「孝」をテーマにしている『本朝二十四孝』は、その特有の倫理性や観念性の故に、西鶴の数多い浮世草子のうち、とりわけ作者の創作意図が問題になっている作品である。例えば「転合書」のあるを取り集めてあらましにうつつして「作品にしたという『好色一代男』」の場合、「浮世の事を外になして、色道ふたつに寝ても覚めても」夢中になる行為を主題にし、自由に創作するためには「転合書」という前提を掲げるポーズが必要であった。ところが、そういう前提があったにもかかわらず、元禄十二年刊『けふの昔』で四方郎朱拙が「渠は此筋の野人にして、論ずるにたらずといへども、ひさしく初心の為に虚名をひきて風俗をみだし、剝晩年には好色の書をつくりて、活計の謀としたる罪人」云々と西鶴に対し非難・攻撃を行ったのは有名である。

が、それはあくまでも「好色」のみに専念する行為の非日常性、それに伴う風俗の乱れの可能性、あるいは前例のない「好色」についての俗な表現方式等に対する非難ではあり得ても、人間の本性である「性」そのものの否定を意味するのではなかったはずである。だから、西鶴は「好色」即ち「性」に纏わる人間の諸相を描く時、浮世の倫理・道徳といった儒教的価値観と対立しなくともよかったのであり、「転合書」のポーズを取ってからは尚更のこと、いわゆる文学の「働いき」性をさほど意識せず、自由に「遊び」性の強い芸術を志向し得たと言えよう。

「金銀」をめぐる人間の諸相を描く「町人物」の場合、「金銀」そのものが倫理的意味をもつわけではない。「金銀」は生存のためには不可欠であるが、人間の物欲の根元でもある。「金銀」の有効性が此岸に限られるとしたら、物欲は虚妄にほかならないことは言うまでもない。だから、人間に不可欠であり虚妄でもある「金銀」の意味を問う作者の姿勢に柔軟さがあってもいいはずである。『日本永代蔵』巻一のの冒頭文で作者は、「金銀」の意味について、「始末大明神にまかせ金銀を溜むべし」「時の間の煙死すれば何ぞ金銀瓦石にはおとれり」「しかりといへども残して子孫のためとはなりぬ」と、反転の言説を繰り返している。これは実際、作者にとつて常識であり、テーマとしてそれ以上の倫理性や観念性を意識しなくてもいいのである。

では『本朝二十不孝』の中心テーマである「孝」の場合はどうか。儒教では普遍的人間愛を仁にといい、肉親間の愛情も仁の一つとする。「肉親間の愛情」には子の親に対する愛情—孝、親の子に対する愛情—慈があり、孝・慈ともに「生物学的本能的」なものであるとする。

が、子の親に対する孝を本能的愛情と断定できるものなのかどうか。生物学的に動物の生態をみれば、子が自立して巣立てば親と無縁になる。親は過去まごであり異性や子への感情が未来に向かうのである。人間として生物である以上はこのカテゴリーに入らざるを得ないが、古来、動物の中で人間のみは親と無縁になることのできなかつたのも歴然とした事実である。即ち古今東西を問わず、いつも「不孝」の現実を目睹できても不孝を人間の本性と言えない所以がここにある。

『本朝二十不孝』で西鶴が描こうとしている「不孝」というテーマは、上述したような孝のもつ特性を考えれば、「転合書」というポーズや発想では立ち向かい難い課題であったと言えよう。西鶴が『二十四孝』に

は見られない笑いの世界を「不孝咄」という逆説的手法で作りに出そうとしていたのは明らかである。が、読者は「不孝咄」の内容を笑えたとしても、果たして文学として楽しむことができたのであろうか。作者とて同様な立場のはずであり、創作意図の問題もこの点に深く関わらざるを得ないであろう。

本稿では上述したような「孝」というテーマのもつ個別性の意味を前提にし、同作品における作者の創作意図を考察する。とりわけ序文に顕れている教訓の姿勢と戯作意識をどう理解すべきかについて、序文を読み直しつつ『二十四孝』と『本朝二十不孝』全二十章の個別分析の結果を中心に考えてみたい。

## 二

『本朝二十不孝』創作の際、作者のもつとも意識していた先行作品の一つがお伽草子『二十四孝』であったことは、再論を要しないであろう。と同時に、『二十四孝』を超える作品を創ろうとする作者の意識が『本朝二十不孝』という作品名にこめられていることも容易に察せられよう。『二十四孝』より面白い作品を虚構しようとする試みは、小説のジャンルの面においては、お伽草子より浮世草子へという小説的結構の変化あるいは進展を顕していると言えるが、「孝」というテーマを取り扱う問題意識の面においては、果たして何をめざそうとしているのだろうか。『二十四孝』という書から『二十不孝』という作品を作り出したことには、読者の意表をつく着想の奇抜さはさることながら、孝と対立する形としての「不孝」という人間の行為を問い返さざるを得ない作者の課題が見られることは当然と言えよう。

『本朝二十不孝』の序文に示される作者の創作意図に関する従来の説

は、大きく分けると以下の三つに要約できよう。

一、「不孝の輩、眼前に、其罪を顕はす、是を、梓にちりばめ、孝にす、むる、一助ならんかし」という言葉を一種のカムフラージュと見て、將軍綱吉の二重人格の孝道奨励政策を皮肉っているという野間光辰<sup>1)</sup>の見解。

二、序文から教訓的あるいは談理の姿勢を認めようとする中村幸彦<sup>2)</sup>や岩波文庫本解説の見解。

三、作者の戯作意識を読みとらねばならぬとする谷脇理史氏<sup>3)</sup>の見解。が、西鶴のいわゆる反体制的な姿勢を見つめようとする野間氏独特の見解は、それを実証<sup>4)</sup>できるような不孝咄が作品中に具体的に見られないことが明らかである故、ひとまず措くことにし、ここでは、序文に示される作者の創作意図に教訓的姿勢をみるべきか、あるいは戯作意識を読みとるべきかという二通りの見解を視野に置きつつ、『本朝二十不孝』の序文を検討することにする。

まず、冒頭の「雪中の筍、八百屋にあり、鯉魚は、魚屋の生船にあり」は、『二十四孝』の孟子や姜詩、王祥の故事を原拠としていることは言うまでもないが、これは作者が作品の冒頭より『二十四孝』をいかに強く意識していたかを表している。

岩波文庫本の解説では、「一子寒し親孝行の袖の月、どこにあらうや雪の筍」（西鶴の俳諧大句数八）と詠む作者の孟宗の故事への批判的な言辞を挙げて、冒頭での西鶴の現実的かつ合理的な教訓意識を指摘している。一方、谷脇氏は「すでにその現実性を信じていない二十四孝を、現実の場から見事に揶揄した西鶴の機智をたたえて大笑い<sup>5)</sup>」していたはずの読者像を設定することによって、作者の戯作意識を見つけ出そうとしている。

が、この冒頭文で作者の創作意図たるものを想定しようとする時、教訓性と戯作意識の両側面が果たして対立的になり得るものであろうか。序文にのみならず作品全体の構造の中に明確な形で一側面に収斂する創作意図が成り立つものであろうか。

非現実的・非合理的であり、又、盲目的にさえ思われる『二十四孝』の孝行譚への当時の読者側の読み方を考える時、注目に値するのは、作者の言説である。

「鯉魚は魚屋の生船にあり」の原拠とされている「姜詩」の孝行譚、つまり、「江の水」や「生魚の鱸」を要求する母に常に孝行をつくす姜詩夫婦への天の報償に対して、作者は「かやうの不思議なることのありけるは」と語ることによって、天の報償という結末は主人公の孝行に対する天の感動によるものであるが、と同時に、不思議な現象・非現実的な出来事でもあることを認めるのである。このような言説は『二十四孝』に多く見られる。

丁蘭―それよりして、かりそめのことをも、木造の気色をうかがひたるとなり。かやうに不思議なることのあるほどに、孝行をなしたるは、類少きことなるべし

楊香―父子ともに、虎口の難をまぬがれ、つつがなく家に帰り侍るとなり。これ、ひとへに、孝行のこころさし深き故に、かやうの奇特をあらはせるなるべし

剡子―そもそも、人として、鹿の乳を求むればとて、いかでか得さすべきなれども、思ひ入りたる孝行の、思ひやられてあはれなり

「不思議なること」「奇特をあらはせるなるべし」「得さすべきなれども」等の言説は、孝行譚の感動の構造が現実性・合理性のみで成り立

っていないことを示唆している。孝行譚の非現実性・非合理性を認識しつつも、むしろ、そういう現象を願望する作者や読者側の心理が投影されていると見るべきである。主人公の孝行への天の感動は、ほかならぬ地に存する人間の感動そのものであり、『二十四孝』を享受しようとする読者側の一種の文学的感動につながっていると言える。「忠孝礼」

(天和二年)あるいは「文武忠孝を励まし、可<sub>レ</sub>正<sub>レ</sub>礼儀之事」(天和三年の武家諸法度)等に見られる徳川幕府の支配イデオロギーの教化性、その一環としての孝道の奨励の面などは当然存在したが、『二十四孝』に描かれる「孝」は、上述したように作者の言説を中心に考えるとき、イデオロギーのそれとは別の側面をもっていることがわかる。至難な孝行の実践は教訓的であるが、孝を志向する行為が人間の心性に発している時、教訓性は文学的感動を呼び起こす孝行譚を形づくることになる。『二十四孝』が教訓性を作品前面に出す「孝」の文学として、何世紀にもわたって享受されてきた所以であろう。

以上見てきた「孝」の文学としての『二十四孝』の教訓性を西鶴も当然みつけていたはずである。「雪中の笋……」の冒頭文で「奇跡を求め、天の恩恵を期待するような不合理な、二十四孝な孝道を批判」していることは、以下、「世に天性の外、祈らずともそれぐの家業をなし、禄を以て万物を調べ、孝を尽せる人常なり」の言説をみれば明らかである。『二十四孝』のもつ教訓性への批判ではあり得ないことも確かである。超自然的な力、即ち、天より与えられる奇蹟による孝の非現実性を批判しているかみえる作者の言説は、「生きとしいける輩、孝なる道をしらすんば、天の咎めを遁がるべからず」とあるように、『二十四孝』の天道の超自然的レベルに近づいている。孝行への天の感動と不孝への天の咎めは、非現実的な抽象性において同質のものである。作者は、非

現実的な『二十四孝』の孝行譚を批判しつつも、そのもつ象徴的教訓性を認めているのである。

一方、「雪中の…」の冒頭文に、「読者にとつても常識となつてゐる孝道觀を、面白おかしく、簡潔に表現」しようとする作者の意識が示されていることも明らかである。それは『二十四孝』を超える作品を書くこととする意思表明の一環でもあつたと言えよう。が、「八百屋」「魚屋の生船」等のような現実の場からの俗語を用いるレトリックは、「雪中の笋、八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり」の冒頭文にのみ限られ、以後の序文には見られない。「八百屋」「魚屋の生船」という用語で表現される近世的現実主義・合理主義からの『二十四孝』批判は、「天の咎め」を語る作者の言説によつて一過性の笑いとどまつている。

孝の文学としての『二十四孝』の孝行譚を不孝咄に作り変える発想の奇抜さ、近世の現実の場から『二十四孝』の孝行譚の非現実性をからかう文体等に顕れる作者の戯作意識は、『二十四孝』の教訓性の否定を意味しない。作者は『二十四孝』を超えるべく笑いを作品の前面に創り出すとしてゐるが、同時に、孝をみつめる作者の教訓的意図は『二十四孝』のそれよりも強烈なものになつてゐると言えよう。『二十四孝』に示される孝の世界を願望してゐるはずの人間が、実は「諸国見聞するに、不孝の輩、眼前にその罪を顕は」してゐることを語る作者の言説は、カムフラージュのポーズでも一過性の笑いを誘うレトリックでもないであらう。少なくとも、序文において作者の教訓的意図を疑ふ必要はない。

### 三

巻一の一「今の都も世は俗物」の主人公・篠六は、「かくれもなき歴々の子」であつたが、家業には専念しないで、七年このかた相続の金銀

を「若女ふたつ」につかひ果たし、「隠居の貯へ」までも狙うほどの不孝者である。「俄に浮世もやめがたく」、悪所金を借り出す長崎屋伝九郎を仲介に、親の死を前提にする「死一倍のかり金千両」を工面させるのみならず、親の毒殺までをももくろむ主人公の行跡は、荒廃した人間精神そのものを顕している。「若女ふたつ」に相続した金銀をつかひ果たしたことが、金銀のために親の死を願うことにはささかの同情の余地もないことは言うまでもない。主人公の行為に、自分の生存のためにやむを得ず親を犠牲にせざるを得なかつたというような悲劇性を発見するのは不可能であらう。不孝の因果が、主人公のみじめな死という応報にいたるといふ設定は、序文の「生きとしいける輩、孝なる道をしらずんば、天の咎めを遁がるべからず」と語る教訓性の具体化にほかならない。又、主人公の死に方も、現実性に欠ける、まさに、天の咎めそのものである。色狂いの資金を手に入れるために死一倍の依頼、親の毒殺のもくろみ等をあえてしてかすほどの小賢しい主人公が、うっかり毒の試し飲みをしてしまつたという応報の描写は、不自然であり、非現実的でもある。篠六は、「世に天性の外、祈らずともそれぐの家業をなし、禄を以て万物を調へ、孝を尽せる」常の人ではなかつた。結局、「孝なる道をしらずんば、天の咎め」を受け、「眼前にその罪を顕は」すことになり、序文で示される不孝の輩の典型として描かれるのである。作品中に見える作者の言説をみよう。

○始末を所帯の大事といへり。徒居なく、手足動かせば、人並みに世は渡るべし。

○欲に目の見えぬ、金の借手は、今は、思ひあたるべし。

「始末を…」の言説は、始末儉約、家業精進等の孝行の基本を守らなかつた主人公を描くための立言として成り立っているし、「欲に…」の

言説は不孝の補助を行った長崎屋伝九郎への戒めとみてよからう。「この常の人稀にして、悪人多」い浮世であるだけに、「不孝の輩」の罪を描くことよって「孝にすすむる一助」にしたいという作者の教訓的意図そのものを疑う必要はない。

一方、この章に、『二十四孝』には見られない「笑い」を生じさせる描写が多いのも事実である。例えば「俄に浮世もやめがたく」て長崎屋伝九郎に死一倍を頼む悪知恵の発想、借り手の年恰好を見に使いに来た手代との次のようなやり取り、

「笹六、美男を俄に逆鬢にして、身を見ぐるしうなし、今年二六なるを、三十一なりますと知れてある年を、まざまざと五つ隠されし」

「我々が、思ひ入れて、ながうはあるまじ。これに、相詰めし者どもは、あの親仁様の葬礼を頼みに、この大臣に御奉公申せば、時節を待たず、婿の明けさしましやう御座る」

「手形は、二千両の預かりにして、小判一両、月一匁の算用に、一年の利金ばかり、首に取るなり」から始まる、死一倍の金千両を使い果たす過程、

「いよく、親仁の無事を嘆き、江州多賀大明神に参り、親の命を短く祈れど、何を聞きし、この神は、寿命神なれば長生きを恨」む悪行ぶり、

親仁の毒殺をもくろむが、「毒菜取り出し、これ気付ありと素湯取りよせ、噛み碎き、覚えず毒の試みして忽ち空しくな」つてしまう応報の結末の描写。

等々、主人公の不孝の咄を滑稽化し、読者の笑いを誘おうとする作者の意図は一読明らかである。「又、室町三条の辺に、かくれもなき歴々の子に」と始まる主人公の登場から「さまぐ、口をあかすに、甲斐な

く、酬、立所をさらず、見出す眼に、血筋引き、髪、縮みあがり、骸体、常見し五つ嵩程にな」る主人公の死を描く作品の末尾まで、作者は一章のほぼ半分以上の叙述を、主人公の度外れた不孝ぶりや言語道断の悪行の描写に費やしている。そしてここに作者の戯作意識が介在していることは当然である。

が、上述したような巻一における作者の戯作意識と、序文の「雪中の筈」におけるそれとは同質のものではない。超自然的な力による『二十四孝』的な孝の在り方を揶揄し、しかつめらしい読み方を皮肉るパロディの笑いの核心は孝の現実性や合理性に基づいていると言えよう。そして、このような問題意識をつきつめて行き、不孝咄という『二十四孝』のパロディとして作品化したとすれば、上述したような戯作意識の落差はなかつたはずであろう。近世の現実の場から不孝の諸相を描こうとする序文での戯作意識の鋭利な諷刺性は、巻一の一の具体的な作品世界では変質させられているのである。そしてこのような戯作意識の変化は、『二十四孝』的な天の感動による奇蹟を批判した作者が、一転して「この常の人稀にして悪人多し…天の咎めを遁るべからず」と『二十四孝』的な教訓的世界の発想を語るることによって予告されているとみべきであろう。

巻一の一で『二十四孝』のパロディ意識が認められるのは、主人公の毒の試し飲みについての叙述である。親に薬をすすめる前に毒味したという「漢文帝」の逆設定<sup>11</sup>であることは明らかであるが、このパロディの発想には、序文の「雪中の筈」に示されている『二十四孝』の非合理性を皮肉っているような姿勢は見られない。この結末に頭れるのは単純な戯作意識と、極悪非道の不孝に対する徹底した応報の教訓性である。不孝咄を描くことよって孝の世界を形象しようとする浮世草子に、

孝というテーマを人間性の問題と関連づけ、その意味を詮索しようとする近代的視野や作家の苦悩を期待する必要はない。又、序文「雪中の笋……」で『二十四孝』的な孝の在り方を批判したとはいえ、その代案としての孝の在り方を不孝咄に盛ることは無理であろう。浮世に横行する不孝の諸相に対し作者はそれを誇張することによって戯作化し、読者の一過性の笑いを誘うが、孝というテーマを抱えている作品であるだけに、不孝の主人公の結末の描写には『二十四孝』以上の教訓的叙述や応報的方法を用いるしかなかったと言える。

以上、巻一の一における作者の孝に対する教訓的姿勢と戯作意識という二元的構造を、序文との関連性を通して考察したわけであるが、教訓と笑いを同時志向する作家の二重的姿勢は、いくつかの章を例外にして、作品のほとんどで一貫していることが以下の分析で明らかになると思う。巻一の一の例のように各作品の分析の詳細を明らかにすべきであるが、紙面の制約があり、全二十章の分析の要約のみを提示する。

a、家業専念と孝の関連において

- 家業に専念しない不孝咄の設定：九話（巻一の一、巻一の二、巻一の四、巻二の一、巻二の三、巻三の二、巻四の一、巻五の三）
- 主人公が娘に設定されて家業とかかわらない作品：四話（巻一の三、巻二の二、巻三の一、巻五の一）

- 家業専念と関連をもたない作品：七話（巻二の四、巻三の三、巻三の四、巻四の二、巻四の三、巻四の四、巻五の四）

全二十章中半分に近い九話において家業に専念しないで悪行をはたらかず不孝咄が描かれている。又、巻一の三の小鶴、巻二の二の小吟、巻三の一の乙女（五女）、巻五の一の小さな場合は、世継ぎでない娘故に家業への責任はないはずの女主人公たちの不孝咄であるが、娘の奇行や

悪行が家の没落を招くことになるので、前九話の不孝咄の構造と変わらない。その他の七話は、巻二の四のように遺産分配をめくつての息子同士争いの果てを描く章、巻三の三のように不正な手段によって家業を行う主人公の没落を描く章等になっており、家業に専念しない不孝咄の類型とは違った視点による考察が必要であろう。

b、不孝や悪行を行う主人公の造型

- 不孝に至る過程の描写はなく、最初から徹底的に悪人に設定される作品：一三話

- 悪行は行わないが家業に専念しない親不孝の例：一話（巻一の四）
- その他：六話（巻二の四、巻三の一、巻四の二、巻四の四、巻五の三、巻五の四）

c、主人公の不孝や悪行の応報としての結末

- 主人公やその家族の怪異的で非現実的な死：八話（巻一の一、巻一の二、巻一の三、巻二の三、巻三の一、巻三の三、巻三の四、巻四の三）
- 不孝や悪行の現実的な応報としての死（破滅）：九話（巻一の四、巻二の一、巻二の二、巻二の四、巻三の二、巻四の一、巻四の二、巻五の一、巻五の三）

- その他：二話（巻四の四、巻五の四）

d、作者の言説の作品紹介

- 作者の言説のある例：一八話
- 作者の言説のない例：四話（巻四の四、巻五の二、巻五の三、巻五の四）

○作者の言説のある例一六話中、主人公の不孝や悪行に対し戒めの教訓的言説として対応している例：一三話

○戒めの教訓的言説として対応していない例：三話（巻四の一、巻四の三、巻五の一）

以上 a～d の分析の結果、作者の創作意図は明らかになったと思う。それを要約すると次の通りである。

○作者は二三話において家業を滅ぼす不孝の悪行に走る主人公を造形している。これは、序文で「それが、の家業をなし、禄を以て万物を調へ、孝を尽くせる人常なり。この常の人稀にして、悪人多し」と語る作者の言説と一致していると言える。

○不孝や悪行を行う正当な理由もなく最初から悪人に設定される作品も二三話である。

○結果として親不孝を行ったすべての主人公に応報としての死や家の破滅が与えられる作品が二〇話中一七話にもなる。「生きとしいける輩、孝なる道をしらずんば、天の咎めを遁れ」ない、まさに教訓の世界である。

○作品中に登場する作者の言説は二三話において主人公の行為に有効に対応しており、創作意図を一層明確にしている。

○作者の言説のない作品は、母親に成り変わった狸退治をめぐる浪人兄弟作弥、八弥の行為を描く巻四の四、「夜は十三日の続け呑むほどの大酒飲み墨屋団兵衛の滑稽な飲みぶりを描く巻五の一、病的に相撲に夢中になる才兵衛の奇行が中心になる巻五の三、喧嘩好きな徳三郎と親孝行な浪人虎之助との出会いを描く巻五の四等である。いずれの場合にも主人公の行為を「天の咎めを遁れ」ない悪行や不孝と断定することは難しい。作者の言説が見られないのは自然といえよう。そして、この四話の作品についてもまた違った視点からの考察が必要であろうが、これについては別稿にゆずりたい。

## 四

朝鮮のハンゲル小説のうち、「孝」をテーマとするもつとも代表的な作品として『沈清伝』を挙げることができる。『沈清伝』をめぐる朝鮮小説史の状況を詳述する紙幅はないが、以下の要約文で示されているように、『本朝二十不孝』の作品世界の究明に『沈清伝』との対比視点を導入は有効であると思われる。その根拠を、両作品の文学史的な背景等を踏まえつつ、一つ書に要約する。

○『沈清伝』の創作年代は一八世紀前後と推定される。又、漢文に対するハンゲルで書かれた俗文学であったことも西鶴小説の状況と近似的。

○朱子学を中心とする儒教や民衆レベルでの仏教の影響圏に両作品はあった。

○読者層の拡大。作者が読者や社会を意識するいわゆる文学の大衆化現象の存在。

○朝鮮の『三綱行実図』が日本で和刻され、『二十四孝』や『孝行物語』等の仮名草子に影響を与えていたことは、徳田進氏の『孝子説話集の研究』や中村幸彦氏の論考<sup>14)</sup>等で指摘されているが、『沈清伝』も同じく『三綱行実図』の影響を受けていることは言うまでもない。

○両作品ともに、以前の孝行譚と明確に区分できる小説的結構をもつ作品である。

以上から対比の必要性は十二分認められると思うので、以下、『沈清伝』の作品世界をみることにする。但し戦後出ている韓国での多様な研究成果を総合的に踏まえることになるので、詳細な引用は省略する。又、徳田氏の前掲書『孝子説話集の研究』にも『沈清伝』について九行程の

記述があり、作品の概要について簡単にふれている。

『沈清伝』の板本は京板本、完板本の二系列がある。京板本は説話—小説—パンソリの過程を、完板本は説話—パンソリ—小説の過程を経ており、「パンソリ系小説」とも呼ばれる。

作品の概要（京板本、完板本の共通のストーリー）は次の通りである。没落両班で貧乏な盲目の沈鶴圭は妻に死なれ、苦勞しながら一人娘の沈清を育てる。沈清は父に孝養をつくす孝行娘に成長する。ある日、沈鶴圭は三百石の供養米を仏前に供えれば目が見えるようになるとの住職の話を聞いて布施の約束をする。悩む父親のために沈清は、航海の安全をはかるための祭物になることを約束し、供養米三百石を寺に寄進する。こうして沈清は海に投身するが龍宮の侍女たちによつて生き返る。蓮の花に乗せられ地上に戻った沈清は王妃に迎えられる。そして全国の盲人を集めて宴を催す。宴に参席した沈鶴圭は思いもよらぬ娘の声に肝をつぶして立ち上がったとたんに目が見えるようになった。

又、主要人物として張氏夫人と沈鶴圭の後妻がある。親孝行の沈清にいつも同情している裕福な両班家の張夫人は、沈清の行おうとする殺身による孝行、即ち、盲目的に追求する儒教的観念に反対し、現実的な解決方法による孝の実践を主張する。一方、沈鶴圭の後妻は物質志向の現実的な人物として設定され、息女を犠牲にしたにもかかわらず、依然として盲目にくらす沈鶴圭を一層世俗化し戯画化する役割を果たしている。以上の『沈清伝』の概要を基に、作品の主題と構造等の作品世界について述べれば、次のように要約できよう。

○孝を主題とする『沈清伝』は『三綱行実図』等の先行孝行書のもつ勸善懲惡の趣向を受け継ぎながら小説の結構を形づくった。

○主題は儒教的孝と仏教的孝の両面を内包している。朱子学の説く合

理的儒教倫理の外に民衆レベルでの素朴な仏教の因果思想が顕れている。儒教的な孝は現実的、世俗的世界で描かれ、仏教的な孝は非現実的、超自然的な世界で描かれる。

○作品構造は現実世界と非現実世界の対立構造をもつ。現実世界では世俗への批判的写真描写による戯作意識や諧謔性を中心であり、非現実世界では説話譚的モチーフの世界や主人公の自己否定による仏教の応報的な結末が中心である。前半に見られた反主題性（沈清は孝を実践すべく殺身成仁をめざすが、「身体髮膚受之父母」を語る儒教の教えに反し不孝を行う逆説的状况に陥る）は、後半の非現実世界を通して克服されることになる。

○孝のもつ美しき象徴性への民衆の願望は、『沈清伝』の倫理性（教訓性）と文学性の結合につながっていると見える。作者の創作意図は、先行孝行書には見られない現実諷刺による笑いの追求と教訓的テーマと言える孝のもつ美しき象徴性やその世界の形象化の両面にあったのである。

## 五

『二十四孝』には親の子に対する愛情—慈は描かれない。親の無理な要求があり、それに応える子の愛情—孝のみが目立つ世界である。一方、『本朝二十不孝』の場合は、逆に親の子に対する愛情と子の不孝が描かれる。不孝の行為のもつ動物的生態性と、これとは一見矛盾した現象にみえる人間の孝への志向性の両側面を鑑みれば、『本朝二十不孝』の親の愛情と子の不孝という設定は『二十四孝』より現実的であり、また教訓的効果ももたらしていると言えよう。「諸国見聞するに、不孝の輩、眼前にその罪を顕はす」例の多い現実を目にしている作者は、「不孝咄」



をもって「孝」を教訓するという逆説の機知を表しているのである。不孝の行為に同情し、孝そのものの意味を問い直そうとする創作意識が作者にない以上、「不孝咄」という逆説に笑いが伴うのは当然と言えよう。しかし、読者が「不孝咄」の諸相を笑うことは出来ても文学作品として楽しむことはできないことを作者は認識していたはずである。孝を教訓する意図をもつ作者にとって、不孝に走る人間の諸相が滑稽に誇張され、又、非現実的と思える程徹底的に応報が加えられる作品構造は当然の帰結であったと言えよう。

同じく孝をテーマにしている朝鮮朝ハングル小説『沈清伝』の場合にも、「孝」のもつ象徴性を志向し美化しようとする意図は明らかである。又、『三綱行実図』等の先行孝行書とは一線を画す小説的結構を形づくる同作品に目立つ特徴の一つは、笑いを呼び起こす写実的世態諷刺と言えるが、それを作者側の創作意図とみることはできないのは上述した通りである。『本朝二十不孝』の不孝に対する天罰の解決方式と『沈清伝』の超現実世界での孝の美学の完成は近似している。両作品の基盤に勧善懲悪の文学観の流れが潜んでいることは否定できないが、孝というテーマのもつ特殊性の故、作者の教訓的意図の帯びる勧善懲悪的姿勢を非文学的要素と貶すことは無意味であろう。

元禄五年刊広益書籍目録には、「仮名和書」として今でもよく知られている『二十四孝』『同着書』『同諺解抄』『釈氏二十四孝』『翁問答』『孝行物語』『おやこ物語』の孝行書がみられ、これらが大量に出版されていることがわかる。こういう孝行書発刊のブームに便乗する形で際物的に書かれたとも言える『本朝二十不孝』は「物語類」に分類され、上記の孝行書と一緒に読まれていたことがわかる。

そして西鶴は当然それを予想しつつ作品を書いていたはずである。西

鶴が彼の小説において作家として読者を強く意識し、文学の社会的意味に気付く時点は正に同作品からだったと言える。

### 〔注〕

- (1) R・ウェレック・A・ウォーレン『文学の理論』筑摩叢書③ 参照
- (2) 重沢俊郎『原始儒家思想と経学』岩波書店 参照
- (3) 加地伸行『儒教とは何か』中公新書 参照
- (4) 野間光辰『西鶴新新致』岩波書店
- (5) 中村幸彦『中村幸彦著作集・第五巻』中央公論社
- (6) 谷脇理史『西鶴研究序説』新泉社
- (7) 谷脇氏は前掲書で、前述の野間氏の説について「作品の中から教訓の仮名にかくした不孝者への西鶴の共感を読みとるか、現実の中で不孝者たらざるを得なかった人間の悲劇として主人公たちを西鶴がとらえていることを作品から具体的に実証」されない限り同説は成り立たないと指摘している。
- (8) 谷脇理史 前掲書
- (9) 岩波文庫本『本朝二十不孝』解説
- (10) 谷脇理史 前掲書
- (11) 徳田進『孝子説話の研究・近世篇——二十四孝を中心に——』井上書房
- (12) 前掲書所収「朝鮮説話集と仮名草子——『三綱行実図』を中心に」
- (13) 「沈清伝の孝子譚の考察」という題目になっているが、高橋亨氏の『朝鮮文学研究』に依っている。
- (14) パン(舞台)とソリ(声)の合成語。舞台で演唱する声という意味である。広大(俳優)と菜工(太鼓)の二人だけの出演で行われる。文学では詞章がその対象である。
- (15) 日本で紹介された戦前の『沈清伝』の研究として、金台俊『朝鮮小説史』東洋文庫270の著述がある。『沈清伝』の梗概・典拠説話等を紹介している。

付記：本稿は国際交流基金研究助成によるものである。

(チヨン ヒョン 筑波大学外国人研究者・檀國大学副教授)